

一 はじめに

副助詞「は」（以下「は」と称す）と格助詞「が」（以下「が」と称す）の使い分けは助詞の中で最も難しいと言われ、上級者でもマスターするのに苦労する。理論的な研究は早くからなされ、現在ではあまり取り上げられなくなったようである。しかし、「は」と「が」はマスターしにくいという問題が完全に解決された訳ではない。本稿では、「は」と「が」が台湾の教育現場で、どのように指導されているのか、また、学生は「は」と「が」のどの用法が得意で、どの用法が定着させにくいのかなどを調べ、今後の学習方法の一つとして活用出来得るものを探り、「は」と「が」の使い分けの上達に役立つヒントを提出したい。

二 アンケート分析

国立高雄第一科技大学入学以前、どのように「は」と「が」を学んできたかを知るために、92学年度（2003年9月）入学の四技一年生（以下大一と称す）と二技三年生（以下大三と称す）を対象に、2004年1月に「は」と「が」に関するアンケートを行った。本章ではそのアンケートの分析から、今後の習得のための一助となる手懸りを見付ける。

(1) 日本語学習歴

日本語学習歴を下の図1で見ると、55.7%が3年、17.3%が2年、4年が5.7%と、3年が最も多い。大一の中には日本在住経験者も2人いる。しか

し、注目すべきは、学習歴1年未満の者が11.5%もいるということである。これらの殆どは本校入試合格後に学習したと思われるが、教える側、学ぶ側に非常に大きな負担が掛かるのは必至である。一方、大三の学習歴は5年が54.2%、6年が10.1%、4年が8.4%というように、5年が最も多く、大一と大三とに大体2年の差がある。しかし、年数は長くとも、授業が週に2時間だけだったりする者もいる。よって、これら年数が勉強の総時間数に比例しているとは限らない。いずれにせよ、試験に合格して入ってきたのであるから、授業には付いて行けるであろうし、付いて行かなくてはならない。

次に、大一52人と大三56人の出身学科を下の表1のようにまとめた。

表1 出身学科統計表 (単位%)

出 身 学 科	大一	大三
日本語学科	3.8	30.4
外国語学科日文組	1.9	0
応用日本語学科／応用外国語学科日文組	55.8	50.0
商用日本語学科	5.8	0
小計	67.3	80.4
普通科	11.5	0
総合高中	13.5	0
その他の学科	7.7	19.6
計	32.7	19.6

表1を見ると、日本語学科（組）出身は大一が7割近く、大三は8割に達する。つまり、非日本語学科出身者は大一の方が多（32.7%）。出身校を調べると、大一では育達高級職業学校が約半分を占めている。大三で最も多いのは文藻外語学院（3割弱）で、その次が崑山科技大学（2割弱）である。

（二）「は」と「が」の学習情況

学生の出身校が区々なため、使用した教科書や参考書、副教材、担当教師の教授テクニックなどは違って当然であり、また、学生の学習能力、学習方法、学習態度も学習レベルに大きく関係してくる。従って、「は」と「が」の定着情況も微妙に違うであろう。本節では、黄国彦・謝逸朗合著『明解日本語語法一助詞篇』に記載されている「は」と「が」の用法を基に、学生の入学以前に学んだ「は」と「が」の用法、練習方法、訂正情況などを分析し、実情に迫る。

1. 教師から学んだ用法

本項では、『明解日本語語法一助詞篇』に記載されている「は」の用法7種類（a～gで標示）と「が」の用法10種類（ア～コで標示）、「は」と「が」の区別の項を基に、学生が学校或いは塾などで、教師からその内のどの用法を学んだかを調べる。

表2 学んだ「は」の用法の順位

順位	大 一		大 三	
	%	用 法	%	用 法
1	79	b. 排他性を表す特別な提示 c. 2つの事物の対比を表す	86	d. 強調の語気を表す
2	7	a. 叙述の主題を表す	8	c. 2つの事物の対比を表す

	5	d. 強調の語気を表す	4	
3	7 1	f. 条件の提示 g. 独特なロジック関係を表す	8 1	a. 叙述の主題を表す b. 排他性を表す特別な提示
4	6 3	e. 取り敢えず肯定し、後で転換する	7 8	e. 取り敢えず肯定し、後で転換する
5	5	その他	7 1	f. 条件の提示 g. 独特なロジック関係を表す
6			3	その他

上の表2を見ると、1位のパーセンテージが大一79%、大三86%、と7ポイントもの差があるのは、学習歴の違いの現れであろう。大一と大三それぞれ上位4種類を比較すると、順序は異なるものの、同じ用法が並んでいる。b. とd. を混同する者もいるようなので、そう考えると上位は順位が同じだとも取れる。下位の3種類を見ると、順序は異なるが、同じ用法が並んでいる。e. の用法は初級教科書にはあまり出てこないのが印象が浅いであろう。

下の表3から、「が」の用法でも「は」と似た傾向が見られる。上位と下位の用法がほぼ同じなのである。意外に低いと思ったのは、大一のイ。「疑問詞、不定詞を主語とする」である。主語に疑問詞が来れば「が」が続くという絶対的ルールはどの用法よりも分かり易く覚え易いと思うのであるが、あまり印象に残っていないらしい。下位にランクされた用法は順序まで双方同じである。教科書に余り挙げられていないものである可能性が高い。ケ.などは教科書には出てこないが、大一と大三どちらも54%の学生が学んだと答えている。教科書以外で見聞きしたと考えられる。

表3 学んだ「が」の用法の順位

大一			大三		
順位	%	用 法	%	用 法	
1	88	ア. 現象文の主語 カ. 二重主語文の小主語	92	キ. 希、好、能、巧、難、怖の対象を表す	
2	79	ギ. 希、好、能、巧、難、怖の対象を表す	88	ク. 二重主語文の小主語	
3	77	ウ. 存在文の主語	83	ア. 現象文の主語 ウ. 存在文の主語 エ. 条件節の中の主語	
4	73	エ. 条件節の中の主語 オ. 連体修飾節の中の主語	81	イ. 疑問詞、不定詞を主語とする	
5	71	イ. 疑問詞、不定詞を主語とする	80	オ. 連体修飾節の中の主語	
6	63	コ. 慣用語の主語	71	コ. 慣用語の主語	
7	58	ク. 連体修飾語を構成する	68	ク. 連体修飾語を構成する	
8	54	ケ. 叱責や軽蔑の語気を表す	54	ケ. 叱責や軽蔑の語気を表す	
9	10	その他	3	その他	

注：「希、好、能、巧、難、怖」とは、「希望、好き嫌い、能力、巧拙、難易、恐怖」の略である。

次に、「は」と「が」の区別について学んだかを見てみる。下の表4によると、最も知られていない用法は、④「「が」は通常最も近い述語に呼応し、「は」は通常文末の述語に呼応する」というもので、大一が58%、大三が61%とほぼ同じである。両者に見られる顕著な違いは、⑤「「は」の前に付く名詞は通常「既知」名詞で、「が」の前に付く名詞は「未知」名詞である」と⑥「連体修飾節の中の主語には「が」しか使えない」の用法である。順位で言えば、大三では2、3位につけているのに対し、大一では下から2位であった。

9つの区別のうち、大三が80%以上をマークした用法は5つあり、大一ではたったの1つである。しかし、大三が大一に僅かに低いもの、それは、②「目の前の事実や具体的な状態を描写する時は「が」を、一般の事実や真理、恒常的な状態を説明する時は「は」を用いる」、③「単純に叙述のテーマを提示する時は「は」を、多くの事物から特定のものを指す時は「が」を用いる」、⑧「疑問詞が主語に現われた時は「が」を、述語に現われた時は「は」を用いる」の3つである。学習歴2年の差からいうと、負けるものがあるはずがないと思うのであるが、前述したように、大三の中には学習歴が3年に満たないものや、非日本語学科出身者がいるので、あり得ない話ではない。

表4 学んだ「は」と「が」の区別 (単位 %)

	用 法	大一	大三
①	「は」は「既知」(旧)情報を提示し、「が」は「未知」(新)情報を提示する	6 7	7 3
②	目の前の事実や具体的な状態を描写する時は「が」を、一般の事実や真理、恒常的な状態を説明する時は「は」を用いる	8 3	8 0
③	単純に叙述のテーマを提示する時は「は」を、多くの事物から特定のものを指す時は「が」を用いる	7 3	7 1
④	「が」は通常最も近い述語に呼応し、「は」は通常文末の述語に呼応する	5 8	6 1
⑤	「は」の前に付く名詞は通常「既知」名詞で、「が」の前に付く名詞は「未知」名詞である	6 7	8 3
⑥	連体修飾節の中の主語には「が」しか使えない	6 7	8 6
⑦	条件節の中の主語には「が」しか使えない	7 1	8 1
⑧	疑問詞が主語に現われた時は「が」を、述語に現われた時は「は」を用いる	7 5	7 4
⑨	普通の二重主語文の中での大主語に「は」を、小主語に「が」を用いる	7 7	9 2
他	その他	8	7

上表の数字を見る限り、「は」と「が」の区別を叩き込まれたという印象は受けない。特に大一では、現在広く使われている教科書の内容から言っても少々無理なようである。教科書については第三章で触れることにする。

2. 練習及び訂正

「は」と「が」を対応させた練習を下の図2に示したが、練習をしたと答えた者は、大三が66%と低い値に留まっている。しかも、大一は大三の半

数ほどでしかない。もともと文法が好きな学生というのは少ない、そこへきて複雑な「は」と「が」の練習をさせるというのは、教師の方も尻込みするであろう。或いは、授業数が足りないとも考えられる。

下の表5から、「は」と「が」の間違いに全く気が付かない者が大一に35%、大三に24%いる。

ミスに対する認識	(単位%)	
	大一	大三
間違っているけど全く気が付かない	35	24
間違っていることに気が付くときもある	62	76
無回答	3	0

誰でも自分の事は鏡のようなものがなければ分からない。学生は必ず誰かに訂正してもらわなければ間違いに気が付きにくいし、直しようがない。下の表6では、「周りに誰かがいても即座に訂正してほしい」と答えた学生は、大一が69%、大三が85%である。大一はまだ訂正されることが恥ずかしいのか。或いは、訂正されると余計に自信を失くし萎縮するので嫌なのだろうか。大三はやはり向上心が恥ずかしさに勝つくらいまでに成長したのであろうか。

表6 会話の訂正についての要望 (単位%)

会話の訂正についての要望	大一	大三
周りに誰かがいても即座に訂正してほしい	69	85
周りに誰もいない時に訂正してほしい	17	14
その他	4	3
無回答	6	0
無効	0	2

恥ずかしいと思う気持ちが上達にブレーキを掛けることは誰もが分かっていることである。ならば、恥ずかしさを乗り越える練習が必要である。例えば、5人一組になり、1人が間違った言葉を話し、他の誰かがそれを訂正する。そして訂正した人が間違った言葉を話すというゲームというのはどうであろう。間違った言葉を話す人が、意図的に間違ったのか、本当に知らないで間違えたのか誰にも分からない。そうすれば、間違えるのが怖い人も段々恥ずかしがらないうえに言えるようになり、言えば必ず誰かから反応が返ってくるという、今までは恐怖であった「刺激」にも慣れて、他人に何かを話すという行為が平気になっていくのでは、と想像するが、どうであろうか。

表7 会話の訂正についての対処 (単位%)

	大一	大三		大一	大三
教師が必ず訂正する	38	24	教師以外の人が必ず訂正する	6	2
教師が時々訂正する	31	32	教師以外の人が時々訂正する	19	19
教師が即座に訂正する	15	17	教師以外の人が即座に訂正する	10	5
教師が後で訂正する	12	14	教師以外の人が後で訂正する	8	7
教師は訂正しない	6	22	教師以外の人には訂正しない	4	25
(教師の部分) 無回答	10	3	(教師以外の人の部分) 無回答	48	39

さて、「即座に訂正してほしい」という学生の要望に、教師はどこまで応えているであろうか。上の表7では、訂正する教師が圧倒的に多いが、「即座に訂正する」教師は大一が15%、大三が17%と、非常に低い。教師の方にも進度や授業の段取りがあつたり、疲れて学生の相手ができない時もある。「は」と「が」をテーマにした授業でない限り、血眼になって一々訂正するのも無理な相談かもしれない。会話の時間や機会は極限られているのだから、学生は授業外に時間を見つけて話す機会を作り、訂正されるチャンスを増やしてほしいものである。「無回答」の中に、教師以外の人と話さないという者がいたことから、前述のゲームで鍛えれば、他人との日本語でのコミュニケーションをより多く作り易くなるであろう。他人というのは同級生も含まれるのだから、クラスで同級生同士日本語で話すようなブームが起これば学習が楽になり、成績もグンと上がるのではと期待する。

「教師以外の人には訂正しない」と答えた人は大三に25%もいる。教師以外の人に訂正してもらえた人はラッキーであると言わざるを得ない。その人達には訂正の義務はないのであるから。逆に、「教師は訂正しない」という答えが大一6%、大三22%であった。間違ってもいいから兎に角話す練習をさせたいと考えている教師もいるので、このような結果が出たと思わ

れる。

下の表8で、「教師は学生が間違った箇所を授業中に取り上げて説明する」と答えた者は大一で16%、大三で41%である。やはり、授業時間が足りないのか、ゆっくり説明している暇がないのであろう。しかし、下の表9にある要望の値を見ると、もう少し教師には頑張ってもらうようお願いしたい。学生の方も、教師が学校内にいる間はいつでも教師を尋ねて行けるのだし、そんな学生を追い返す教師もいないはずである。教師が傍に居るのは大学時代が最後である。聞ける時に聞き、直してもらえる時に直してもらわなければ

表8 作文の訂正についての対処 (単位%)

	大一	大三
教師は間違いを必ず訂正し、返してくれる	27	41
教師は間違いを時々訂正し、返してくれる	4	8
教師はいつも間違いを訂正せずに返す	2	2
教師は時々間違いを訂正せずに返す	0	3
教師はいつも作文を返さない	4	1
教師は時々作文を返さない	0	0
無回答	13	2
教師は学生が間違った箇所を必ず授業中に取り上げて説明する	9	20
教師は学生が間違った箇所を時々授業中に取り上げて説明する	7	21
教師は学生が間違った箇所を授業中に取り上げて説明しない	2	2
無回答	31	12

表9 作文の訂正についての要望 (単位%)

	大一	大三
提出した作文の間違いを訂正して返してほしい	58	75
間違った箇所をまとめて取り上げ、授業中に説明してほしい	48	81

ば。学生にはもう少し自分の方から行動を起してほしい。一方、表9にあるように、消極的な大一の学習態度はどうしたものか。間違った箇所を授業中に取り上げて説明してほしい者は48%であるということは、説明してほしいくない者が52%いるということである。一見すると、勉強がしたくて大学に入ったのではないかのようである。説明されると益々混乱し、嫌いになるからであろうか。もしそうであれば、教師には分かりやすい説明をお願いせねばならない。

三 教科書分析

本章では、台湾でよく使用されている日本語教材『大家的日本語初級Ⅰ』、『大家的日本語初級Ⅱ』、『大家的日本語進階Ⅰ』、『大家的日本語進階Ⅱ』、『にほんごのきそⅠ』、『にほんごのきそⅡ』、『新日本語の基礎Ⅰ』、『新日本語の基礎Ⅱ』、『初級日本語』という4種類の教科書(計9冊)の中に出現する「は」と「が」が、『明解日本語語法一助詞篇』で説明されている用法のどれに属するのかを分類・統計し、その出現順位及び出現回数を明らかにする。各教科書の構成は様々であるが、研究対象となる資料内容の同一性をはかるため、主な調査範囲を教科書の中核と

なる「新出単語」、「文型」、「例文」、「会話」の部分に限定した。

「は」の出現順序は全ての教科書が共に「叙述の主題を表す」「排他性
を表す特別な提示」がほぼ同時でトップに登場する。その他の用法は『初
級日本語』を除いた全ての教科書が「強調の語気を表す」「独特なロジッ
ク関係を表す」「2つの事物の対比を表す」の順で現れる。「叙述の主題を
表す」「排他性を表す特別な提示」の両者を合わせた出現回数ほどの教科
書も90%以上に上り、その他の用法は4%以下である。少々バランスが悪か
ろう。4%の「は」の意味をもう少し重視すれば、「は」の世界を自然と感
じられるようになるのではないかと思う。

表10 「が」の出現順序

教科書名	1	2	3	4	5	6	7
『大家』	存在 願望	疑問 小主 対象	連節	慣用	現象	条節	
『きそ』	存在 小主 願望	疑問	慣用	対象	現象	条節	連節
『新基礎』	存在 条節 小主 願望 対象	疑問 慣用	現象	連節			
『初級』	疑問 存在	現象 小主 対象	条節	連節	願望	慣用	

注：『大家』は『大家的日本語』、『きそ』は『にほんごのきそ』、『新基礎』は
『新日本語の基礎』、『初級』は『初級日本語』を表す。

「が」の出現順序は、上の表10にある通りである。4種類の教科書に共通
して最初に教えられるものは「存在文の主語」で、「二重主語文の小主語
」や「疑問詞、不定詞を主語とする」も早くに登場する。『初級日本語
』だけに見られる特徴は「現象文の主語」が他の教科書よりも早く、「希
望、好き嫌い、能力、巧拙、難易、恐怖の対象を表す」と「慣用語の主語
」の出現が遅いことである。また、4種類の中で最も大きな違いは『新日本
語の基礎』に見られる。それは、「が」が初出する第9課でいきなり5種類
の用法を教えていることである。

全教科書で共通している点は、「は」では「取り敢えず肯定し、後で転
換する」が、「が」では「叱責や軽蔑の語気を表す」と「連体修飾語を構
成する」の用法が紹介されていないことである。いずれにせよ、もう少し
バランスの取れた教科書が欲しい気がする。

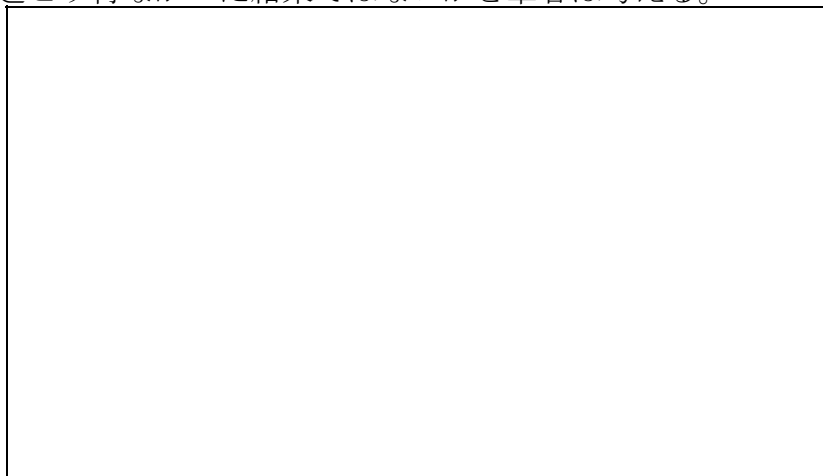
四 テスト結果

第一章で学習状況を見てきたが、学んできたものが定着しているかどう
かはテストをしてみなければ分からない。テストも色々で、それぞれ長所
と短所がある。ましてや、1種類のしかも短期間での調査では絶対的な判断
が下せないうえ、ある一部分においての評価になってしまう。それを承知
で、本稿では日本語能力試験でも採用している穴埋め形式によるテストを
行った。期間は2004年1月から2004年12月である。テストは「は」と「が」

」の用法計17種類をそれぞれ3問ずつ用意し、一回のテストを51点満点とし、毎回主に語彙だけを変えて約6ヶ月おきに計3回のテストを実施した。採用件数は大一が50人、大三が55人である。尚、参考として三回目のテスト問題の一部を付録に載せておく。

(一) 平均点

平均点をグラフで表すと下の図3になる。二回目のテストでは成績が下がることなど全然頭になかった筆者は、どの程度成績が上がるかだけを楽しみにしていた。しかし、結果は驚くべきものであった。特に大三の成績が85点から80点に下がったことである。一回目のテストの後で、少しでも文法書を開いて復習してくれていれば、二回目にあれほど悪くなる結果が出るとは考えにくい。よりによって、大三は大一より悪くなっていたのである。学習歴2年の差に何か秘密があるのか。それとも、一回目が総まぐれ当たりだったのか。三回目に期待したが、残念なことに、三回目の成績は一回目を超えられなかったのである。学生にはテストを3回行うとは予告しなかったが、殆ど語彙を変えただけの同じスタイルのテストであったにも拘らず、成績は振るわなかったのである。また、大一と大三の点数差が余りに小さいのも不思議である。皆80点から85点の間である。2年の差だけでは平均点が90点以上になることはないのだろうか。「は」と「が」の習得は、学習歴3年で限界に達するという意味なのか。それにしても、一度でも文法書を見てくれさえすれば、一度でも教師に質問してくれさえすれば、起こり得なかった結果ではないかと筆者は考える。



下の図4と図5では、上位者(50点満点で42点以上を取った者)の成績は最終的に1年前より下がり、下位者(50点満点で41点以下を取った者)の成績は1年前より上がっている。上位者の入学後の学習方法、学習スタイルは入学以前と何かが大きく違ったのであろう。上位者の今後の変動が気掛かりである。大三の多くは卒業すれば、日本語に接する機会は今より減るだろう。せめて、卒業間際には、一回目の成績に戻ってほしいものである。

--	--

筆者は大一にも些か危惧を抱いている。なぜなら、彼等の32.7%が日本語学科以外の出身で、学年の約半数が学習歴3年未満だからである。幸い、下位者の成績が上昇傾向にあるので、教える側はこのまま手綱を緩めず頑張って頂きたいと思う。この結果が参考に値するものであれば、大一が大三になった時には、大三が残した成績よりも優れた成績が出るであろう。

(二) 用法別の変動

本項では用法別に上達したもの、逆にできなくなったものなどを詳しく見ていく。

下の表10を見ると、大一大三に共通して上達した用法は、ア.「現象文の主語」、イ.「疑問詞、不定詞を主語とする」の「が」とf.「条件の提示」の「は」である。f.の用法は、教師から学んだ用法の順位では大一、大三どちらも下位にランクされていた。イ.は大一が5位に、大三が4位にと比較的低い位置にあった。つまり、イ.とf.は大進歩した訳である。共通してできなくなった用法は、エ.「条件節の中の主語」オ.「連体修飾節の中の主語」カ.「二重主語文の小主語」の「が」である。エ.とオ.は大一大三共に教師から学んだ用法の順位で中ランクに位置していた。カ.は大一大三共に88%と上位にランクされていたが、大一は正解率が90%から87%へと

表11 用法別の変動

変動形態	大一	大三	共通
↗	d f アイ	a b f アイキク	アイ f
∧	b クケ	ウ	
—	a キコ		
∨	c g	c d e g ケ	c g
↘	e ウエオカ	エオカコ	エオカ

注：変動形態：↗は成績が上昇したもの。∧は二回目の成績が上がり三回目にも悪くなったもの。—はほぼ平行線を辿ったもの。∨は成績が一旦落ちて再び上がったもの。↘は成績が段

々下がったもの。

僅かに下がり、大三は88%から75%と大きく下がった。二重主語文の大主語小主語はあまりに有名だが、大三がこのような結果を出した理由として考えられるのは、例えば「象は鼻は長い」も「象が鼻が長い」も文法上では正しいことを彼等は知っているため、そう答える者が多かったのであろうと推察する。出題が不適當であったとも言えるが、筆者としては、大三にもなれば、出題形式が前後の脈絡のない文である時には、一般的にどのような答えを選ぶべきかということを知っていると思っていた。勿論、「文法的には正しいのだから、正解にするべきだ」と抗議されても反論はできない。以上のことから分かるように、このテストでは、その場に合った「は」と「が」の使い分けが上手くできているかどうか、確かな答えは出せなかったということである。

最終的に一回目より成績の上がった用法は、大一では8種類、大三は10種類になり、成績が悪くなった用法は、大一は9種類、大三は7種類である。

下位3種類（a、エ、ケ）を除く用法の正解率が、大一では78%から100%の間に集中し、大三では82%から98%の間に集中していた。しかし、最終テストではそれぞれが、60%から99%に、75%から99%に分散した。大三は入学後、教科書以外の多種多様な文章に触れる機会が急増し、色々な言葉の使い方を吸収したことによって、逆に、文法書にある例文をそのままの形で触れることが急激に減り、所謂訓練された「模範解答」ができなくなったとも考えられる。しかし、大一でも同じような現象が起きているが、原因は同じではあるまい。

正解率が90%以上あった用法は、大一がア．イ．キ．コ．f．の5つで、大三がア．イ．キ．ク．コ．b．d．e．の8つである。しかし、80%台では、大一が7つ、大三が2つである。つまり、正解率80%以上を取った用法の数は大一が12個で、大三が11個と、又もや大一に負けてしまった。勿論、「は」と「が」以外の知識や技能が「は」と「が」を補ってくれているのは確かであるが、せめて文法書に載っている基本的な用法は正解率を90%以上に乗せたいところである。

教師の方々には、以上の結果を幾分なりとも参考にしていただき、学生達が上手く「は」と「が」を使えるようにご指導してくだされば幸いである。

五 おわりに

学習者なら誰もが文法書を読んだであろうが、一度や二度では理解しにくい。そのため、専門知識のある教師から指導を受けるに越したことはない。分からなければ何度も読み返し、教師に食い下がる根性がなければ、本当に理解できない。そして、最初は分かったようで分からない状態での練習が続くであろう。教科書にある文章をスラスラ読めるまで練習するのは当然である。基礎が出来なければ応用はできないからである。授業中だけでなく、授業外の時間をフルに利用して練習する決心をすることも大事である。語学の素質のない者は特に弛まぬ努力が不可欠である。教師の出した課題は必ず真面目にこなし、たとえ教師が要求しなくても、目標を下げることなく、自分の理想を叶えるよう努力しなければならない。

「暗記」させるのを嫌う教師もいると聞く。古い練習法だと一笑に付される。しかし、暗記無しにはどうにもならないものもある。五十音や漢字、慣用語などがそうであろう。理屈なしに覚えなければならないものが

ある。数学の公式を覚えるというのと同じである。文法も例外ではない。語学習得の基本は模倣からくる暗記ではないだろうか。暗記というのは、何度も反復練習を繰り返して得られる必然的な「結果」である。つまり、覚えてしまったと言えるくらいまで反復練習をするというのが大事である。正しくアウトプットできるということは、脳の中に確実にそれが在るからである。分かり切ったことがなかなか実践に移せない。「は」と「が」の説明はたった数ページである。もちろん、それを全て覚えたとしても「は」と「が」を完全に理解し、正しく使えるようになるとは断言できない。しかし、少しでも理解できれば楽しくなる。そこへ到達するまでの僅かな努力を惜しむのはもったいないことではないだろうか。

参考文献

- 国広哲弥 (2004) 「認知意味論の諸問題」『2004當代認知與嚴學與日語研究創新研討會論文集』台灣大學日本語文學系p1～3
黒沢晶子 (2005) 「日本語教育文法から見た無題文の「が」」応用語文教育的理論與實際 銘伝大学2005国際學術研討会
黄国彦・謝逸朗合著 (1982) 『明解日本語語法—助詞篇』文笙書局
国際交流基金 財団法人日本国際教育協会 (2002) 『日本語能力試験 出題基準 改訂版』凡人社
佐治圭三 (1996) 「外国人にはどうしてハとガの違いがわからないのか」『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房 p 47～56
謝逸朗著 (2000) 『中国人日本語学習者における日本語学習上の諸問題—台湾日本語学習者を中心として—』櫻花村出版社p159～180
白川博之監修 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著 (2004) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
藤田直也 (2002) 『日本語文法 学習者によくわかる教え方』アルク p7～38
町田健 (2001) 『言語学が好きになる本』研究社p90～98
宮島達夫・仁田義雄編著 (1995) 『日本語類義表現の文法』くろしお出版
三吉礼子・吉木徹・米澤文彦共著 (2002) 『すぐに使える実践日本語シリーズ9 ことばをつなぐ助詞 (初・中級)』専門教育出版p10～16、p102～108

付録

問、()の中に「は」或いは「が」を入れてください。

1. そとは今雪()降っています。
2. この文章のどこ()間違っていますか。
3. ショーウィンドウに美味しそうなケーキ()たくさん並んでいる。

4. 警察（ ）ルールを守らなければ、庶民も守らない。
5. 彼女（ ）スピーチコンテストに参加したのは、高校生の時でした。
6. カンガルー（ ）尻尾（ ）長くて太い。
7. お金があれば、最新の電子辞書（ ）欲しい。
8. 我（ ）社は英語、中国語、日本語、パソコンに秀でた人材を募集している。
9. この卑怯者め（ ）。
10. 風邪を引いた時は、もっとビタミンCを摂ったほう（ ）いいよ。
11. 蛙（ ）両生類である。
12. 親を悲しませること（ ）するな。
13. 林さんに（ ）CD、谷さんに（ ）デジタルビデオを貸してあげた。
14. シドニーはオーストラリアの首都で（ ）ない。
15. 授業に出（ ）したが、寝ていた。
16. こんなことを子供に教えて（ ）いけない。
17. 今朝（ ）トーストに紅茶でした。
18. レモン（ ）酸っぱい。
19. 横道から突然バイク（ ）飛び出してきた。
20. このプレゼント（ ）誰にももらいましたか。
21. 雪山と合歓山とどちら（ ）高いですか。
22. 新聞（ ）読むが、テレビのニュース番組（ ）見ない。
23. 東港の道路に小さいエビ（ ）干してありました。
24. 山田さん（ ）日本へ帰ったら、手紙を出そう。
25. 3度目だから、失敗すると（ ）思わない。